

第254回 今月読んだ本
福本和夫 思想の再解釈
— 「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ (7)

第3章 サア^{かえ}販ろう、販^{かえ}って戦おう

— 帰国、福本イズムの誕生へ (1924—1926)

1 蔵書目録と香取丸

福本和夫はカルチエ・ラタンの下宿で3つの草稿のほか、2冊のノートを作成した。

1冊目は留学中に訪れた場所と日時、それまでの研究経過と将来の研究・行動計画を記したものであった。このノートは弟の一人に預けていた。3.15検挙が始まり、官憲に押さえられると研究・行動のプランがわかってしまうために焼き捨ててもらった。2冊目は留学中に購入した書籍類を分類、整理して書名、発行年を記した蔵書目録であり、まとめるにはかなりの労力を要した。2冊のノートを製本屋に出す。パリの製本技術は世界一と言われており、背と両端に青い皮を使った頑丈で美しい装幀の仕上がりに大いに満足した。

福本の下宿に来た前田寛治は、蔵書目録の扉にペンで絵を2枚描き旅行記の扉には福本の横顔をスケッチする。福本は「来た、見た、知った、サア販ろう、販って戦おう」と書いて前田に与えた。パリに訣別し革命に身を捧げる決意をこめた言葉である。帰国後、前田は「あれにはひどく感動し共鳴したよ、今でも暗誦できるよ」と語ったことがあった(『裸像』19頁)。

蔵書は出獄後の窮乏生活のため、そして日本ルネッサンス史論の完成に必要な和本や写本を買い求めるためにほとんどが切り売りされた。「蔵書目録も形骸だけ残って、あわれ中身は、すっかりもぬけのからになってしまっている始末であるが、じつはそれもあまり残念におもっているわけではない。」(『裸像』20頁)

清水多吉によると、神奈川近代文学館に蔵書目録の手書き原稿とタイプ打ちの目録が所蔵されているという(筆者未見、前掲『柳田國男の継承者』230—231頁)。1922年から1924年にかけて出版された哲学、思想、政治、経済といった人文・社会科学分野の基本文献はもちろん、前田のアドバイスがあったのか印象派、キュビズム(福本は「立体派」の語を使う—岩田注)、表現主義などの図書、浮世絵の研究書なども含んでいる。

福本は1924年の8月末、マルセイユから香取丸で帰国の途につく。行先は神戸である。留学生は慣例として往路は1等船客、復

路は2等船客であった。2等船客の中に東北帝大経済学部からの在外研究員であった宇野弘蔵と妻マリアがいた。宇野夫人は福本が大学で統計学を教わった高野岩三郎（1871-1949、東大教授を辞職し大原社会問題研究所の設立時から没年まで所長、NHK第5代会長、日本社会党顧問）の長女である。

ロンドンから香取丸に乗っていた宇野はマルセイユを出港した翌日に福本と偶然出会う。宇野の回想によると1日か2日ずいぶんと議論した。

（議論の焦点は一岩田注）唯物史観と経済学の関係だな。ぼくはその点がよくわからなかったからね。彼は唯物史観を絶対のようについていた。そういうように記憶している。ぼくはロンドンでボグダーノフ（1873-1928、ロシアの革命家、小説家、内科医、「サイバネティクス」「一般システム理論」の先駆者、輸血実験のため死去一岩田注）の社会史があるでしょう、あれを英文で読んでいたんだ。……もともと唯物史観と経済学の関係についてぼんやりした疑問をもっていたので、そういう疑問をぼくはいったように覚えている。そして結局は「きみは学校の先生でもしたらいいだろう」ということでケンカ分れになった。彼は自分が学校の先生になるはずなのに、そういうことをいった。……やはりぼくがボグダーノフを読んでいたことで多少軽べつしてそういつらしいーそういう感じを受けたな。

（前掲『資本論五十年（上巻）』238頁）

仙台に帰った宇野は福本の論文を読んで感心する。『資本論』の「二巻と三巻とでは論理段階が違うんだというのを聞いて驚いたのだ。これは後までぼくにとっては大事なヒントとなったわけだ。」（前掲241頁）『社会の構成並に変革の過程』（1926年）は「大変な勢いで……左翼の学生はみんな読んでいたのではないか。そして研究会をやるしね。それにぼくも出てこいというんで出たことがある。」（前掲243頁）とも語っている。

1958年1月、福本は宇野と34年ぶりに再会した。宇野が東大を退官する2ヶ月前である。福本の友人が宇野の編集者であり、「宇野さんはあなたの著書はなんでも集めて読んでおられ、鼻の本まで買ってもらえるそうで、たいそう好意的で懐かしがっておられ、帰りの船での思い出を聞かされました。」と福本の思い出を記したノートを見せてくれた。それにはこうあった。

「当時は、福本氏は帰国すれば、レッキとした高商教授の職があったが、僕は、大原社会問題研究所をくびになって、どうし

ようかと思案に暮れていたものだ。今は逆に僕が大学でめしを食っており、福本君は筆で生活しているらしい、容易ならぬことであろうに、大そう多方面にわたって独創的な研究をつけているのには驚いている。人生は皮肉なもので面白いものだ。」こういって呵々大笑された。云々とあった。(中略)

彼の真情あふれる好意は、言葉のはしばしからもうかがえて、私を感動させた。そして私は、これならお互いにもっとはやくあえばよかったなあ、といった。(『裸像』28頁)

なお、福本は『資本論五十年(上巻)』を寄贈された1970年1月に、福本のマルクス主義的方法論についての宇野の発言に電話で抗議している。これは学問上の見解の相違であって、二人の良好な関係を損ねるものではなかった。宇野は東大退官後、法政大学社会学部で教鞭をとる。『日本捕鯨史話 新装版』(1978年)、『日本ルネッサンス史論(復刻版)』(1985年)などが法政大学出版局から出版されるとき、労を取ってくれたのは宇野であった。

シンガポールでは大谷光瑞(1876-1948、浄土真宗本願寺派(西本願寺)第22代宗主、西域探検家)らが乗り込んできた。1等船客だった大谷はシンガポールでゴム園を経営していたようだ。

小柄で風采の上がらない2等船客が福本に「自分は各地を流浪する社会主義者で山川均をよく知っている」と話しかけてきた。宇野もこの男のことをよく覚えていて、「てっきりコミンテルンの密使だと思っていた」と34年ぶりの再会時に語っている。福本は素性の知れないこの男に「山川氏の理論を批判しなければ日本の運動はしっかりしたものにならない」といった趣旨のことを話し、親しくもならず神戸で別れた。

2年後の1926年のことである。コミュニスト・グループ(治安維持法の前身である治安警察法に抵触する第1次共産党(1922年設立)が1924年に自発的に解党した後に再結成された非合法組織)と連絡がついて間もない頃、キャップをしていた佐野文夫(1892-1931、日本共産党幹部、1929年に獄中で転向)に「船上で山川批判をしなければならぬと語っていたそうですね。大いに期待していたんです」と言われた。福本は「香取丸船上から山川氏とコミュニスト・グループの両方に帰国の挨拶を電報で打っていたようなものだ」と笑いながら応じた(『裸像』24頁)。

謎の人物は誰だったのか。福本は「名前は何か、ハッキリとしたことがいえないので、ここではさしひかえることにしたい」(『裸像』23頁)と奥歯にものが挟まったような言い方である。明らかにすると支障をきたすのだろうか。

2 ルビコン川の此岸で

福本は1924年9月に帰国する。故郷で静養した後、10月から11月にかけて仙台の伊達政宗廟（瑞鳳殿）近くの丘の上の宿舎で2つの論文「経済学批判のうちにおける『資本論』の範囲を論ず」と「河上博士の経験批判論（マッハ主義）を批判す」を執筆した。

福本思想、福本イズムについては次章以降で論じることとして、ここでは帰国後の就職先、論壇デビューの経緯など具体的な動向に注目したい。

福本は帰国後すぐに日本経済学史、日本資本主義の現状、日本農業（農民）問題などを研究しようと考えていた。大学で学んだ経済学関連の講義は抽象論、原則論であって日本の現実に触れたものは皆無であった。外国の学問の受け売りであった。日本の歴史的発展と現状を具体的に知らなければならない。

そのために東京・神田や本郷の古本屋街で文献資料を熱心に買い求めた。その中で次の2冊はとりわけ印象深かった。福田徳三『日本経済史論』（1907年、留学中の1900年にドイツ語で刊行）と横山源之助『日本の下層社会』（1899年）である。福本が学生時代に興津の旅館で「『資本論』を3回読んだ」という自慢話を聞いた学者が福田だった（第2章参照）。横山（1871-1915）は著名なジャーナリストで下層社会のルポルタージュを中心に活動した。河上肇のベストセラー『貧乏物語』が所詮はイギリスの貧乏物語であった（第2章参照）のとは大きく異なり『日本の下層社会』は福本が知ろうとしていた労働者階級的生活ぶりを活写していた。

「サア販ろう、販って戦おう」と勇んで帰国した福本はできるだけ早く実践の中に飛び込みたかった。一方で勉強の必要性も痛感していた。日本の現状を学問として、さらには実体験として学ばなければならない。結局のところ、福本は学問的にも経験的にも未熟なまま政治の世界に投げ込まれてしまう。本人の思惑から離れて客観的な視点に立てば、あと数年、せめて1、2年でもアカデミズムに籍を置いて日本社会を俯瞰しつつ政治の機微に触れることができたら、福本の人生、そして日本の左翼運動の歴史も少しは変わっていたかもしれない。歴史には「たれば」や「もしも」は通用しない。時は待ってくれない。福本の不幸は本格的に実践に取り組むための準備期間がほとんどなかったことであった。

当時は留学から帰国後10年間は政府または指定機関で勤務する義務が課せられていた。高い金を払って留学に行かせてすぐに辞められないようにするのは国にとっては当然の措置である。どうすれば教授職の義務年限をできるだけ短縮して可能な限り早く解放されるか。福本は思案を巡らせて妙案を思いつく。そうだ、大学院に籍を置き義務年限を延期して、タイミングを見計らって辞めることは

できないか。それが無理なら、教授を務めながら大学院に籍を置いて研究はできないものか。

全国で最も学生が左翼化している京都帝大が好都合だ。京都に通うには小樽（高商）は遠すぎる。そこで山口高等商業学校（現山口大学）に勤務することにして京大大学院と交渉を始めた。研究テーマは日本経済史と日本農業問題。指導教授を決めなくてはならない。前者は本庄栄次郎（1988-1973、江戸期の経済財政史を研究）、後者は河田嗣郎（1983-1942、大阪商科大学（現大阪公立大学）初代学長。『歴史の終わり』（1992年）で世界的に有名なフランシス・フクヤマ（1952-）は孫にあたる）にそれぞれ当たってみる。河田教授はニコニコ顔で承知したが、本庄教授は面倒そうであった。経済史の成績を聞いてきた。「経済史は新渡戸さんにおそわりまして、たしか九十八点でした」（『裸像』42頁）と答えると大学院入学を許可した。文部省に大学院の入学が許可された旨を報告すると、高商の教授に専念しなければならない、したがって大学院での研究は許可しない、との回答であった。

1926年1月、福本は山口高商に赴任する。福本は私生活を語ることはない。同年12月、三井合名会社（日本最大の財閥の本社）調査役を務める星野正敏の三女・幸子と再婚して山口で暮らす。

1924年12月に福本イズムは生れ、1927年7月のコミンテルンによる「27テーゼ」によって凋落する。福本流の表現を用いると、ジェットコースターのように激しく上昇・下降する過程はどのように過程したのか。

「経済学批判のうちにおける『資本論』の範囲を論ず」と「河上博士の経験批判論（マッハ主義）を批判す」をどの雑誌に寄稿すればいいのか。本郷の本屋で『社会思想』（1922-1930、議会制民主主義の体制を維持して社会主義を目指す社会民主主義派の理論誌）、『マルクス主義』（1924-1929、日本共産党の事実上の機関紙）という薄っぺらな雑誌を初めて目にする。福本には社会運動の経験はない。社会主義、共産主義に関連する雑誌の知識もなかった。

『社会思想』の執筆者は蟬山正道（1895-1980、福本と法学部で同期、当時は法学部助教授、戦後は社会党右派、民主社会党を理論的に支える）、河野密（1897-1981、政治家、当時は日本労農党に所属、戦後は日本社会党の衆議院議員として12回当選）らであり、大学で同級かその前後の者たちであった。合法的左派ばかりでコミュニストは一人もいない。論文、評伝、翻訳紹介など雑誌の体裁を一応はそなえていた。

『マルクス主義』はといえば、ほとんどが翻訳ばかりで論文はほとんどない。雑誌としてはかなり見劣りがする。『社会思想』はど

うやら講壇社会主義か社会民主主義の雑誌だが、『マルクス主義』は確かにマルクス主義を標榜している。後者の執筆陣に知人はないからどんな雑誌かよくわからない。筋を通すならばマルクス主義の論文はこちらに掲載するのがよいのではないか。

非合法のコミュニスト・グループが合法的に発行する機関誌であることを知るのは、この雑誌の最も熱心な寄稿者になってからのことである。表向きの発行所はマルクス協会または希望閣、主筆は山川均、編集事務は西雅雄（1896-1944、岡山県立高梁中学校（現高梁高等学校）で宇野弘蔵と同期、後に南満州鉄道勤務、獄死）、上田茂樹（1900-1932、警視庁で虐殺されたと推定）、高橋貞樹（1905-1935、『特殊部落一千年史』（1919年）で有名、肺結核のため出獄後に病死）があたっていた。

福本は『マルクス主義』編集を手伝っていた林房雄（1903-1975、小説家、1930年に獄中で転向、戦後の大東亜戦争肯定論で有名）の回想記を引用して初期編集陣の内幕を記している。

1953年9月22日付『朝日新聞』にコラム記者が「林房雄がマルキシズムから小説家に転じたのには福本が大いに関係ある」と書いた。林自身は『新潮10月号』で詳しく回想する。

ある日、『マルクス主義』の編集部に、分厚な原稿がもちこまれた。福本和夫という署名がしてあったが、本人がもってきたのではなく、郵送であったように記憶する。

西雅男がさきによんで、おかしい文体だが、何かありそうな気がしますね。ずいぶん勉強した人らしい。ぼくたちのよんだことのない文章ばかり引用してありますよ。（中略）

よんでみて、私（林）はびっくりした。堺利彦も山川均も猪俣津南雄も佐野学も青野季吉も、引用してくれたことがない。日本のマルクス主義者がいかに無学であったかを、いやでもおもいらされる新鮮な内容をもっている。一少なくとも学生理論家の私には、そうおもわれた。完全に圧倒された形で、私は無条件で発表するように西雅雄にすすめた。

福本和夫の論文は、それから毎月つづけて発表された（第1論文の後、1925年だけでも14本の論文が掲載され、内5本は北条一雄のペンネームを用いた-岩田注）。そして次第にセンセーションをまきおこした。さいしょは研究論文だとおもっていたら、三回目あたりから政治論文であることがわかった。引用文ばかりでありながら、それがそのまま山川均をはじめとするふるい指導者に対しての痛烈きわまる批評になっている。

西雅雄は山川均（倉敷出身で西とは同郷人-岩田注）の直弟子であるから、ホトトギスの卵をかえした四十雀のようにおどろいた

が、山川均の理論に対する漠然たる不満がマルクス主義陣営に
みなぎっていたさいであったから、正しい批判はのせなければ
ならぬ、とあきらめたようであった。私のかれに同感した。

(『裸像』36-37頁)

林はこうも書いている。

そのうちに、福本和夫の論鋒は、私にも向けられてきた。「林
房雄の理論もまた、俗悪主義の折衷主義理論にすぎない」と
二、三行で片づけられていたので、びっくりして、福本論文を
さいしょからよみかえしてみたが、何度よんでも、相手が博識
すぎて、まるで八幡の藪(千葉県市川市八幡にある神隠し伝承で有名な
森-岩田注)に迷いこんだようなもので、どこをどう斬りかえせ
ばいいのかさっぱりわからない。私は理論家としての自信を
まったく失ってしまった。(『裸像』38頁)

1925年のいつごろか不明だが、福本は実家に帰郷している。
娘の逸子が「たったこの一度だけでこれが最初で最後」に「父に
だっこされた」のはこのときのことである(第2章参照)。

1925年10月、北条一雄の名で「分離結合論」を提唱した
代表的論文「『方向転換』はいかなる諸過程をとるか 我々はいま
そのいかなる過程を過程しつゝあるか—無産者結合に関するマル
クスの原理—」を発表する。前年に第1次共産党を解党する際、山
川均は大衆運動、労働組合運動への自立的な「方向転換論」を提唱
した。それに対して福本は、労働組合運動から「分離」した革命的
インテリゲンチヤ集団が再び組合運動と「結合」して革命をリード
しなければならない、と主張したのである。翌年には「山川氏の方
向転換論より始めざるべからず」を発表して、山川理論を真っ向か
ら批判することになる。

11月初旬、山口高商に勤めていた福本のもとに京都帝大友会
から2日間にわたる講演の依頼が舞い込んできた。清水多吉は
「大袈裟な言い方をするなら、近代日本を劃するほどまでの内容で
あった」(前掲『柳田國男の継承者』30頁)と講演の意義を強調す
る。第1の理由はこの講義を契機にマルクス主義の思想的原理が学
内外の研究者たちに拡がっていったこと、第2に「弁証法」が「社
会進化論」の文脈から切り離されたこと、である。

連続講演会の統一テーマは進化論であり、第2部の福本講演に
は社会進化論の副題がつけられていた。日本で最初にヘーゲル弁証
法を紹介したのは東洋美術史家のフェノロサ(1953-1908、
東京帝大で哲学、政治学、理財学(経済学)の講義を担当)であり、スペン

サー（1820-1903、ダーウィンの進化論を社会学や倫理学に応用して古典的自由主義を唱える）の社会進化論を講じた。「「弁証法的発展」＝「社会進化説」の一種という考え方は、その後、長い間、日本の思想界ではまかり通っていた。」（前掲31-32頁）

福本の講義には法学部長、教授、助教授らが参加した。なんと最前列には河上肇法学部教授が座っていた。これには福本は恐縮したようだ。

福本は講演の冒頭、弁証法と社会進化論は全く違いと述べ、従来の社会主義者たちがいかに弁証法理解に欠けていたかを説いた。福本は目の前にいる河上教授も弁証法理解が欠如していると指摘した。実際の福本を知る清水は、福本は「何とも堅苦しい明治の律儀な人だと思わせる雰囲気を持たせている人」（前掲32頁）であり、河上教授に対しても丁寧な言葉遣いだったのではないかと推測する。

15歳年下のまだ何者でもない若造に批判されて率直に弁証法理解の浅さを認めた河上は、西田幾多郎のもとを訪れて弁証法について教えてほしいと頼んだ。

そこで西田幾多郎は、ニコニコ笑いながら、ちょうど自分の弟子で三木清という青年がドイツから帰ってきたばかりなので、彼から話を聞いてみてはいかがかと、三木清を紹介してくれたそうである。ハイデggerの許で最新の実存思想を学んで帰ってきた三木清は、福本和夫の論文活動や講演活動を見聞きするにつけても「アンナコトナラ、オレニダッテ出来ル」と嘯いたというのである。もっとも、三木清がそんな風なことを言ったというのは、後年の戸坂潤（1900-1945、唯物論者、『日本イデオロギー論』（1935年）が有名-岩田注）のやや悪意のこもった発言によるものである。（前掲32-33頁）

1926年3月、福本は山口高商を退職扱いになる。念願通りに教授職から解放されたのである。福本は妻の幸子とともに上京する。新居は北品川御殿山にある妻の実家の隣だった。御殿山は大田道灌（1432-1486）がかつて城を構えたこともあり、江戸時代は将軍の鷹狩りの休息所、桜の名所であった。大正末期も今も庶民には縁のない高級住宅街である。しかし、福本は妻を残して単身で本郷の菊富士ホテルに移ってしまう。さらに7月頃には協議離婚する。それまでは一線を画していた非合法政治活動へ飛び込む決意の表れであり、妻に迷惑をかけたくないという配慮だったのかもしれない。それにしても、艶との離婚といい、幸子との離婚といい、福本の身勝手さには大いに理解に苦しむ。

ところで、1914年に開業、1945年3月10日の東京大空襲で焼失した菊富士ホテルには、谷崎潤一郎（1886-1965）、宇野浩二（1891-1961）、広津和郎（1891-1968）、直木三十五（1891-1934）、尾崎士郎（1898-1964）、宇野千代（1897-1996）、坂口安吾（1906-1955）、竹久夢二（1884-1934）、石川淳（1899-1987）、大杉栄（1885-1923）、伊藤野枝（1895-1923）、中条（宮本）百合子（1899-1951）、三木清ら数多くの作家、芸術家、思想家が止宿した。戦後の山の上ホテルを連想させる。近藤富江『本郷菊富士ホテル』（原著1974年、中公文庫1983年）は、地下1階、地上3階（尖塔に1室あり）、客室50、建坪400坪のエキゾチックなホテル（41頁の写真参照）で繰り広げられた人間模様を丁寧に描写する。

福本は京都での講演原稿をもとに1926年2月にデビュー作『社会の構成並に变革の過程』（白揚社）を、さらに『無産者階級の方向転換』（4月、希望閣）、『経済学批判の方法論』（6月、白揚社）の初期3部作を刊行した。近藤によれば、本がよく売れて羽振りがよかったという。日本共産党の国会請願運動に加わった嫌疑（証拠不十分で釈放）で本富士署の刑事が福本の部屋を捜索したとき、7千円記入の預金通帳が無造作に置かれていたという。現在では約1千万円になろうか。来客者の中には福本を「日本のマルクス」と尊敬して訪れる女子学生たちもいた。彼女たちとのあらぬ噂をたてられたこともあったが、近藤は「心に期するところがあったので、他の下宿人との交際を強いて避けていた。そこで「おとなしい人」という印象を周囲に与えたにとどまっている。」（近藤前掲書170頁）と噂を否定している。福本は12月に第2次共産党を設立して地下に潜入する。菊富士ホテル滞在は半年に満たなかった。

幸子に話を戻そう。1927年1月、幸子は男児を出産する。福本邦雄（1927-2010）である。幸子は語学者と再婚して男児を出産するが、再び離婚。父の再婚相手（義母）の援助で大森にカフェ「白蛾」を新築する。客の一人、尾崎士郎（先述、小説家、『人生劇場』（1935年）が有名）は愛人であった。1932年12月、邦雄は生まれて初めて父と面会した。2ヶ月前に東京地裁で懲役10年、未決通算400日の判決が出て、和夫は東京高裁へ上告中であった。翌年、幸子は睡眠薬で自殺する。

1942年4月に釈放された福本は5月に柳田國男を訪問する。その後、福本は邦雄を柳田宅に使いに出すことがあった。福本の柳田民俗学への接近を論じる際に触れることにする。

福本父子の面白いエピソードが残されている。

日本共産党の言論弾圧に抗議して除名になった邦雄は東京大学経済学部を卒業、1951年に産業経済新聞社（通称「産経新聞社」）に入社した。政治部に配属予定だったが、前歴を考慮されてか調査研究室に勤務することになる。「天川機関」（元海軍大学校教授・天川勇による外交軍事の情報収集分析グループの通称、政界・財界に信奉者が多かった）に出向したり産経新聞社によって復刊される『日本工業新聞』の遊軍記者になったりもした。

1958年6月、邦雄は水野成男社長に「社長室に来てくれ」と呼び出される。

水野（1899-1972）は東京帝大法学部仏法科の在学中に新人会に入り、1924年に大学を卒業、同年に日本共産党に入党する。1928年に非合法新聞『赤旗』（当時は「せっき」と呼ぶ）初代編集長となり、3・15事件で検挙され獄中で転向。ソ連共産党の国際組織コミンテルンの独裁体制を否定し、天皇制を是認する国家社会主義を唱えたのである。戦後はフジサンケイグループを創設し産経新聞社長、フジテレビジョン社長、経済同友会幹事などを歴任。日本商工会議所会頭の永野重雄（1900-1984、富士製鐵会長、富士製鐵は1970年に八幡製鐵と合併して新日本製鐵となる）らとともに「財界四天王」と呼ばれた。

「君、今度、岸内閣（第二次）が出来たが、岸（信介）と椎名（悦三郎）から、名指しで『（椎名官房長官の）秘書官に出せ』と言ってきた。ついては、出向して秘書官になってくれ」と切り出されたんです。（福本邦雄『表舞台 裏舞台—福本邦雄回顧録』講談社、2007年、15-16頁、聞き手は御厨貴、「裏舞台」とはいつでも本当の「裏」は語られるはずもない）

岸信介（1896-1987、首相在任期間1957-1960）は独法科出身で上杉憲法学を、和夫は英法科出身で美濃部憲法学を学んだ。戦前は日本の傀儡国家である満洲国の総務庁次長（長官は現地人、次長が日本人で実務を仕切る）、東條英機内閣の商工大臣を歴任、戦後は極東国際軍事裁判でA級戦犯被疑者（不起訴）になる。岸は思想的には対極にある和夫の動向をよく知っていたようだ。大正・昭和前期に青年時代を送ったインテリたちが福本和夫を知らないはずはない。椎名悦三郎（1898-1979）は岸の腹心として満洲国の商工次官、軍需次官を務めた。戦後は内閣官房長官、通商産業大臣、外務大臣、自由民主党副総裁などを歴任、田中角栄（1918-1993）の後継に三木武夫（1907-1988）を指名した「椎名裁定」（1974年）で有名である。

戦前の水野は日本共産党中央委員であり、政治部長中央委員であった和夫の直系の部下だった。入社するときの保証人は水野、尾崎士郎、高碓達之介（1885-1964、東洋製罐創立者、電源開発初代総裁、通商産業大臣、経済企画庁初代長官などを歴任）であったから、邦雄は水野に頭が上がりなかった。

ただ、私が一番気がかりだったことは、私の親父（福本和夫）が親父ですから……。 「親父に差し障りが出やしないか、親父が反対しやしないか」と思ったから、「その点だけが気がかりです」と言ったんです。

そうしたら、「それはまあ、考えよう」と言うわけです。それで初めて、「出向しなければならぬかな」という気持ちになりました。（中略）

秘書官として出た途端に、親父から電報が来た。岸さん、椎名さんから見せられました。「お前さんの親父さんから電報が来ている」と。今でも覚えているけれど、「反動岸内閣ノ秘書官ニ息子ヲスルコト絶対反対 福本和夫」と書いてあった。それは、そうだろうと思う。しょうがない。（前掲17-18頁）

いきなり首相に電報を出すとは和夫らしい大胆な行動だ。邦雄は肝を冷やしたかもしれないが、岸や椎名は内心ニヤリとしていたに違いない。その後、邦雄は政治の表と裏を知り尽くす「政界最後のフィクサー」と呼ばれるようになる。竹下登（1924-2000）とは盟友であった。竹下の実家は江戸時代から続く造り酒屋である。母・唯子（1904-1945）は女学校時代に松江高校教授だった福本和夫の影響を強く受け、酒の名を「出雲大衆」にしたという逸話がある。

ところで意外に知られていないのは、福本和夫が哲学思想の文脈で新しい翻訳語を考案したことである（『福本和夫著作集（第10巻）』こぶし書房、2010年、所収「私の訳語「揚棄」・「端初」・「人間疎外」の半生物語」参照）。

まずは、ヘーゲル弁証法の「アウフヘーベン Aufheben」。この語は「①解消すること、②高めること、③保存することの三つの内容を有している。」（廣松渉ほか編『岩波 哲学・思想事典』1998年、1462頁）この事典は「アウフヘーベン」の項目を立てずに「弁証法」の項で説明する。訳語は「止揚」あるいは「揚棄」とある。「止揚」は福本以前の訳語、「揚棄」は福本の造語である。

「揚棄」を新たに造ったのは1925年11月の京都での講演がきっかけである。『社会の構成並に変革の過程』「序論」では「弁証法に所謂 aufheben これは普通に「止揚」と訳されています

が、私は揚げる（高める）という方を、とどめる（止める）というより第一次的に、主要的に考える方が弁証法的だと考えるのであります」（『福本和夫初期著作集（第1巻）』こぶし書房、1971年、49頁）と「揚棄」を考案した理由を述べている。

「止揚」には矛盾を解消してから（止めてから）高めて新しいものを生み出すイメージ、「揚棄」には高めて新しいものを生み出す過程で古いものを解消／保存するイメージがある。「①解消、②上昇、③保存」を用いれば、「止揚」は①→②、「揚棄」は②→①かつ③となる。「止揚」には③の意味合いが弱い。解消が先か上昇が先か、という問題になるだろうが、ヘーゲル弁証法を螺旋状の動的プロセス、あるいは流動性、生成変化と捉える立場（例えば、川瀬和也『ヘーゲル（再）入門』集英社、2024年、参照）では「揚棄」がふさわしいのではないか。福本は「止揚」派と「揚棄」派者を調べ上げ「止揚」派を論駁しようとする。福本の思想的立場がうかがえて興味深い議論になっている。

「揚棄」は福本の造語だが「疎外」はそうではない。たまたま手許にある『明鏡国語辞典（携帯版）』（大修館書店、2003年）で調べると、「よそよそしくて近づけないこと」に続いて「哲学でイデー（理念）が自己の本質を否定することによって、それが自己と対立・離反する他者的な存在になること」とある（942頁）。

「疎外」の元々の意味は人間関係で仲間外れにすること、うとんじることであり、語源は諸葛亮（孔明）の文章「先帝に背き、疎外せらるる」にあるという（前掲『著作集（第10巻）』178頁）。福本以前は『資本論』などの「エントフremドゥング Entfremdung」は「隔絶」「分離」などと訳されていた。

「Entfremdung＝疎外」の初出は、1925年2月に『マルクス主義』に寄稿した「欧洲における無産者階級政党組織問題の歴史的考察」であった。一例を挙げると、「第二の階級（無産者階級）は、この自己疎外のうちに、自己の否定せられていることを感じ、そのうちに、彼の無力を非人間的存在の現実性を看取する。」（『福本和夫初期著作集（第3巻）』1972年、75頁）とある。現在では「自己疎外」「人間疎外」は人口に膾炙した表現となっている。福本が「疎外」の語を思いつかず「自己隔絶」「自己分離」と訳されていたら、心理学の専門用語として受け取られていたかもしれない。

「端初」に対する思い入れと「揚棄」や「疎外」に対するそれを比較すると、「端初」へのこだわりはさほど強くはない。「端初」の初出は「揚棄」と同様に学友会講演原稿である。「厳密な弁証法展開の方法論」を議論する場面で、福本は次のように語る。

第一に――一般に如何なる方法^{メトード}によって研究を進めてゆくべきかの問題であり、第二に――かくて、とらるべき研究の方法が定まりましたならば、次に、当面の研究対象に対して、それをどこから切り拓いてゆくか――私の所謂「端緒」(Anfang)――を決定するの問題、これであります。

(前掲『福本和夫初期著作集(第1巻)』54頁)

福本は『新約聖書』「はじめにロゴスありき」という言葉の「はじめに」に「初めに」や「太初」をあてることから、「端緒」「発端」と訳されていた「アンファング」を「端初」と訳した。

哲学には「端初問題」がある。ヘーゲル『精神現象学』(1807年)は「意識そのもの」の「感性的確信」を「端初」にしており、マルクス『資本論(第1巻)』(1867年、第1巻のみがマルクスが刊行、第2巻、第3巻はエンゲルスが編集)は「商品」が「端初」である。『資本論』は「なぜ、商品なのか」を問題提起し、『資本論』の「プラン問題」、すなわち「マルクス経済学の全体的体系における『資本論』の位置」問題を提起する。

「疎外」は全面的に「揚棄」は部分的に受け入れられているが、「端初」はほとんど使われていない。